

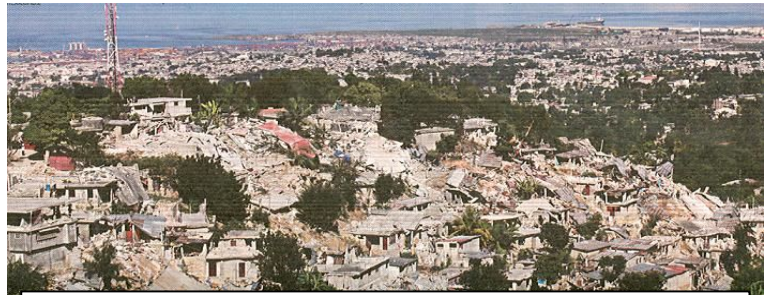
続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.31)

「大なる不幸には大なる対応策」

・・・ハイチ大地震に思う・・・

当地では過日発生したハイチ大地震が、連日マスコミに取り上げられている。2010年1月12日午後4時53分(現地時間)、中米カリブ海にある、ハイチの首都近郊でM7.0の地震が発生。多数の死傷者が出て、死傷者は20万人以上に達する可能性があるという。

カリブ海では、複数のプレート(岩板)が複雑にせめぎあう場所に位置するため、マグニチュード(M)6~7規模の地震が繰り返し起きているが、ハイチ周辺では近年大きな地震は起きておらず、地殻に地震を起こすひずみが蓄積していたとみられている。



地震により多くの建物が崩壊したハイチの首都ポルトープランス

地下のナマズ様は、「俺様を侮ると承知しないぞ、そろそろ、俺様の実力を少なからず見せてやろう」とばかり、ひげをなぜ、体を一ひねりくねらせたのかも知れない？

今回のタイトルに採用したのは、これらの状況を踏まえ、「**A grandes males, grandes remedios**」

(ア グランデス マレス グランデス レメディオス と発音し直訳は、タイトルのとおりの諺である。

過去の歴史のツケで、中南米でも貧しい国に所属しているといわれるハイチ、ある新聞の記事に、「殆ど何も無かった国に、今は何もなくなってしまった」とあり、タイトルに込めたように、素早い対応で、出来るだけ早い復興を願うのみである。

私の配属先では、早速義援金募集を始め、私も相応の寄付をさせていただいた。社員から集まった額と同等額を、配属先ではさらに上積みして贈るといふ。メキシコは国レベルでも、大々的に救援活動に参加しており、軍の病院船の派遣や航空機でスタッフや食料や衣料品を相当数送り込んでいる。

メキシコのマスコミに、大々的に取り上げられるのは、地理的に近いということもあるだろうし、多くのメキシコ人が行方不明になっていることにもよるだろうが、メキシコも過去には大地震を経験し、近年でも時々大地を揺さぶられる地震が起きており、他人事ではない感情の共有があるのではなかろうか。



中南米付近のプレート

メキシコ近辺は、左記の図にあるように、プレートが重なり合う地域の影響を受け、プレート境界地震が発生し、歴史的に見ても、意外と大きな地震が過去から何回も発生している。

しかも、メキシコシティは、16世紀以降湖を埋め立てて街を拡大させた都市で、市街地のほとんどが、軟弱な堆積地盤地帯に位置しているため、地震が起きると被害は大きい。

1985年9月19日にメキシコの太平洋岸に地震が発生し、メキシコ市は、

震源から 300 km以上離れたところに位置していながら、この地震で地盤が激しく揺さぶられ、多数の建物が破壊し、死者の数は五万人にのぼった。JICA ではこの1985年の地震をきっかけに、メキシコへ防災対策の技術協力を行い、専門家の派遣による技術指導、建物や機材の供与などを行なっている。

上記以外にも、メキシコと日本は地震に関しては浅からぬ縁を有しており、1923年(大正12年)9月1日に起きた、死者約10万人には及ぶ関東大震災に際して、メキシコは各国が贈ってきた義援金の内、8番目に多い額を贈って来たと言う。

先回の滞在のときは、勤務先の防災班の班長から、比較的ゆれの大きい地震のあった翌日、日本の会社における地震対策を聞かれ、要請された技術支援項目外であったが、過去に安全対策を担当していたこともあったので、文書を作成の上対策を教えたことがあった。

私には地震には恐怖の体験がある。メキシコの隣の国のグアテマラに派遣されていた30数年前、真夜中に今回のハイチ地震に匹敵する大地震が発生した。強い余震が続くさなか、家族共々家の外の車の中で、震えながら一晩過ごした次の日、出勤してみると、崩壊は免れてはいるものの壁や天井などは崩れ落ちて、私のデスク上には人間の頭大のコンクリートの塊が、天井から落下していたのである。

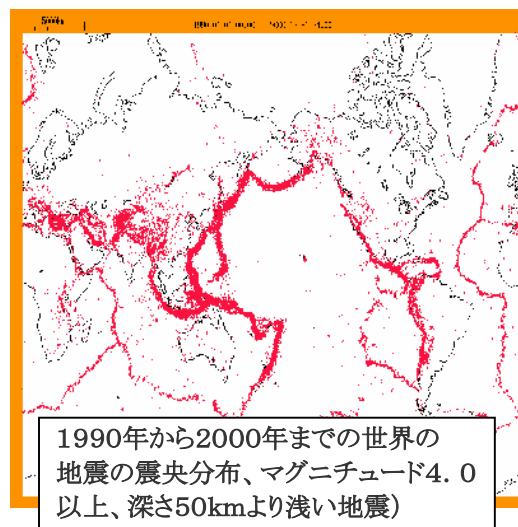
勤務中でなかった幸運さに安堵するとともに、当時は日本の対応が遅く、連日報道される各国の救援活動状況に日本の名前が中々出ず、配属先の社員に、「経済大国でありながら何もしてくれないではないか」などの言葉が投げかけられて過ごしたことと、後日他国に比しても相当多い援助物資を贈ってきたのは、ニュース価値のなくなった頃の記憶などが思い起こされる。

現在では日本も、この種の災害に今回も含めて相当対応が早くなり、大いに意を強くするところである。

災害は忘れた頃にやってくると言われていたが、過去の体験からすると災害は突然やってくるともいえる。日本では古の頃から、「地震」「雷」「火事」「親父」といって、現在では権威の落ちた、最後のものを除いて自然災害に対しては依然として恐れを抱いているものの、残念ながら、日本は世界でも有数の地震国である。

最近の10数年間に世界で起きたマグニチュード6.0以上の地震活動の、約20%が日本で起きており、また日本列島には地震を誘発する、大地の傷とも言うべき「活断層」が数多く存在し、現在は約2000箇所が確認されているという。いずれにしても、我々の生活をみると、毎年何回かは日本列島を通過する台風とともに、常に自然災害と対峙していることになる。

同じ不幸でも戦争なら、指導者と国民の英知で止めることが出来る可能性があるが、自然災害、特に地下の奥深い所で密かに活動している、地震様と火山様にはどの様に備えればよいか難しい。



科学の発展は自然を制するなど豪語する人もいるが、遠い将来はともかく現時点では人間の驕りでしかないと思う。文部科学省の科学技術政策研究所(科学技術動向研究センター)が5年に一回程度発表している、「技術予測調査」での第7回報告書では、地震に関する将来予測では、「被害の発生の予想されるマグニチュード7以上の地震の発生の有無を、数日程度に予測できる技術が開発される」のは、西暦2024年としている。

官民一体となった研究でも、自然を相手の研究はかくのごとく難しく、自然の力には、人間は対抗できずに謙虚にならざるを得ない。この上記の研究が目標どおりになったとしても、私に限ってみると、日本人の平均寿命からすると、安心できる期間は極めて少ない。

突如として起こる災害などは、地球上で自然破壊や、戦争による殺し合いなど様々な人類が犯している業に、神様が怒りの鉄槌を下しているのではなからうかなどと、日頃は宗教心の希薄な者であっても思ってしまう。その鉄槌から身を守るものは、今後とも無いのだろうか。

被災地の人々の悲しみは、人類共通の悲しみでもあろう。犠牲者のご冥福を祈りつつ、さらには、災害が起きることのないようにと期待したり、ボラッチョ・ボニーと氏の残された人生の年数を推定すると、益々テキーラを飲む量が増えてしまいそうだ。

(2010年1月18日)



病院船の派遣

本文中の挿入の、図や写真は、気象庁等のデータおよび地元新聞ニュースより借用した